



文庫20
851
4

晋子一世の奇句いごとくを五元よ
ほくせりといふも奥阿の自画く
戯言の句をありあひ一汁百遍に
破吟又ハ梅巻の曉極店の昏ら
うも是をとしてもねるおと人こ
ハこれをもてとやして節よひの物
よもめ吾がこの青禮とよめを
こころれあやしくさしきりめて
編てまとい書とふとの



五元集拾遺

春之部

日の春をさすかゝり痛れあふ
年之也家中の礼を早月水
松のさし伊勢の家ふ人き誰
神明阿ふ古といふ
行合れ松もくさかき
障ふは川賣も如日おし
痛ふはあは顔剛けく



合

初らばや頼子あつね辰子より
世の中乃榮耀も事とわけれ
糸文の四判を来より美子此間

蓬萊の韻

鳴きよ終之の書院此かやば

福祿壽の韻

長き日や年此がら乃終法作

宝引の韻

保昌ちりりしり胸ふり

松うらやまのさくあゆみすの
花さかた若よ屋上の春か
去れあか流く能く去の

若菜

傘持冬はくしひをさし
菜はと迫し白奥を去れ
はるひの七粒打冬を
うらと菫葉よふ里の朝若菜

大根の画韻

兵乃ひかくむやうし

凡がくふまゝにふ少の柳くふ

山更上京

昔さしもつゝあそびの柳か

傾城の韻

昔柳北額の栴や三ヶの月

鶯

鶯つゝ長刀かゝるあけし

うらひ寸の曉をしゝりくす

鶯の語くゝ笛吹おこせ世絶

うらひあや氣ちうり園のひぬ

あしーせうく

鶯の子冬子ありりく之太樹

鶯の語あふ士をたゝかふを肥

杖起くゝ笛を見するさ同小

す食くゝは後さす足よ雪のふ

大内の子

近隣子系所此猫かすひりく揚屋丁

穿弁子埋くゝをのの候やまゝ弁

幼子 ちゝここの百目あま子小別

穿寺子 柏木乃柳とを造りあうく猫

思他意 飯くへく君の方へと新松梅
疑意 花の夏胡蝶を千似くう辰女

人ふこまやうの粉をうけけし
年少のふらふめりあはすひま

吾京の初午

初午や 賽濤よみハ芝ぬく

初午小寺のわく此例とや
のゆ子連ふね新しきこい

の字より習ひあそびやいり山

山の鴉より乙名とくす入日か

川燕^{オナ}編みすす邪^{オナ}と見えおる

啼る鳥糸はくも古くやおとふ

授記品無有魔事

くまうしーくうく彼岸の夕日新

不生ふ滅れんと

海棠の斜とほきこゆえん像

伶人此門あつりーや春の声

世の中冬何えがき雑子此声

惜春

梅らるやこいを答ふせん風中

かみーくや江戸とて筆を如風中

支那の筆を如の筆を如の筆を如

白川の園より見返すといはれり

白真露命

目と位お生イッマデ雲 真は腫園

白真の及りり如との川けりき

画攢

浦嶋のきりりのまきり落れ声

引くして筆をたたくのふき此弱

駒と如く見見る傍ふ落れだ

すくも掃や掃や掃や掃や掃

泥塵の腕とわらわらん去りて

燕一すくも掃や掃や掃の枕

東漸海守見也

出羽や人並世居と連衣

屋敷入やわらわらわらわら

鶏合

炭食のきりふきと如風

毛衣や服と如風とキヨク

刻す入るくくく冠と筆

老翁此よりふもやさぬ園本丹
後足とひききん園の清きうか

汐干

貝^{ガイ}はくや白洲のまは流る松

貝く貝とむきゆを

あさく貝むくくのぬくくひぬ
夏沼や塩瀬ふよす於くく貝
子安貝二尺の浦と産湯りか
浪推ふくくく嬴螺此かきく
魚ふくくやうく上げくく此栗

海松少くや浪のうけくく此貝
すくく貝き此高濱又くく
くくくく花をすめくく貝
江橋や且船かくく汐干貝

雜

かつくくの神をくく此雜

くくくくくく

世志はか多酒くくん怪、雜
と者くく歌のすくく此歌あり
雑歌のさくくくくく

花

穠のあふほほふめく穠の家
さくすくお目玉の志くせと
口ひらきを笑うく吸く穠小
こまききくも中一教も穠小
京中一へ世々のさくや飛ぶ穠

魏国の書望

山穠血を泣くこの穠子くさ
そと深小翹波さくくひらくらん

山穠澆くひくさ傍わらん

浦くの

花とさくふと

教時と中一尔買む穠さく
去丸の車くくはくやふま穠

花さくけくふ此穠小奴の眼さく画

穠さく此穠持さくむく山さく

穠ひらく穠小虫乳のさくお

大佛膝さくむく穠一穠乃さく

浜坊やふのくけくく穠さく

徳利ねくくさく穠さく

庚申の雨とふ影う

け隙をくく女さるふ見うふ

續 莊子

彼是を嵐雪の偽真のうせ
花多もうつともあう群影は
かんさうやちうけり花をうも
ふ下けくやうふが望く事茶
神カ品現大神カ
法のみちるやうる流とさく言

憶 芭蕉翁

月花や洛陽の寺社強くなく

代 樵

彫^ハ笛^ヲ縫^テ簾^ヲ花^ノ咲^ク人^ノ浮^ル世^ハ
屋^ノ形^ハ舟^ノふ^ル女^ノ中^ニお^より^り
湖^ノ春^トい^ふく

泣^くよむ経^ノ舟^トわ^り花^ハ夏
名^ヲあ^らや^作た^り又^ハ布^ヲ花^ノさ^るぬ
椋^ノ鳥

花^ハ比^レや^天女^ノ負^ヒま^りか^はは^り

寒食二句

を人合や窟下小猫の目と怪む
く案すく小寒人合の家古自取書

画讚

友のら花くしゆく殿まいて情あり
山吹の葉くま玉まぬそくま
きりーす小豆腐を切く捨るや
柴ふ此里の葉摘乃るまきり
あるくの子の名をゆて

ことりや虫のひ子あり蜂く女

舟小輪の葉くけー松小

あよる舟のさくら三八若とくと

何必逃杯走似雲け侍大酒壺

け吐をふくくして遊すけあり小
福あり蝶ありく何とするるる
俗ふくくぬめがくくーよふこる

三月三

式ふふありくまをさるふ白雪や

夏之節

寧耳己

白壳もなるとり斗とる路もく
は新れしまのトとや更衣
ぬぐくや冬千の観音衣く

東叡山院

傍正のまきさひとくや多楓
く日ふらるる淨瑠璃敷此喜簾

時香

かきこすす二声めお冬出馬く
おれあうて標くらふく柳くさく

香を穿る女寺小鬼お子能

山田市之巫

ちりくともゆすはくや部一
観多て耳をわけて柳くさす
ま白くくく我と啼よの杜宇
証くく驚破付多物の戸お
おましくと標まうくくく
ほくく東すお燈のくくわくお
鳴くくくくくくくくくく

郭公中入すくくくくくく

さしとるも木兔はく死しき安
藤さうこだう奥をほりしおん
州の戸や犬も地をを隠者有
ほりし

ゆきしき安雲も輪ふある浦ま

鯉

ふれとあき夏のこえけふ
いし祿の地免ふくく鯉は
書鯉は卵カキコの甲は免らう
人のともいし

人のまふとすのあはしき鯉は

本質

名不き海をんましく鯉は

丹根た系がのとのやうき

系勤と

黒牡丹祿や新しきの太き
むらや漂山と名中やうき
須广北山うし流お何とんき
蟻カキを少んてお卵のふと憎き

浅中家の義士等といふむ

たもたの穂と三つ

伏見此何系

杜より女々の心
何城の暮も空
けし此も朝暮をの
静し降る風も
あ子もさし花も

上野寺

灌仏や暮しむく
紙合ぬかるし

岩倉亭題送懈

みしり扱や隣
庭水や朝日
あまの別業

内川や岸此
枇杷の葉や
秋も魚志
馬士歌
まふら
能化堂

壁の麦蔭よ三年と筑やしくや

豊年

始々味留ふとを流るむ瓜茄子
干瓜やたしるひしりもよきと

祝産育

たぐふの皮し脈の結つみり

大町亭法言 何去略

法のきりた筍羹四も切しりふ
志あひし法師の梅干けり

梅いゝら雨のり愛よおわし

壬二集

さきしんはとち月さあま
名とくしていふひよあま
とがよと

さみさこの名もんせよさあまの
たよ弁れ末葉のこして紙のひ
かやとさあまとて

ものぬれ懐甲や庫のくら
糝うらん驛干しとあまに珍れり
懐網沖ふ冬来つ帆りや

懐之長者の夏や若牡丹

画韻

粽申ふもみや草の紫台蟹
こころな元始よりくろくふあや
根今中津地よりくす花籃

廻文

けささくとのめや音の夏田沼
千山亭新定雪舟の絵子
隅よ草をひきと移しく六月雨
さみさきよやくし吉野と出あし

三味線や藤マキ夜ふくむ六月雨
魚もかろくをか——さつさあ地

題江戸八景

住くらすまの深川の松花雨五月
ささきもや湯の極赤山おけあ
又月あや君のく地かきさき

江の鶴

懲雨の窟や浪一曲閑へ行く
何を言ふすらん鳴くむ六月雨

傾廓

八之湯やちりさげしやまの虎の
旅人をあはせし

津坂や岡の五月始めの馬

腰紙

篠すりの、髪身を交す麻の青

自愧

扱あらしを母麻さくくわ
る篠鳴く扱あらしのつとめ

和古詩

只を焼くくろを煮る扱河津

これ杜國例をくくせ

あしを織くくくくく

おつすくくくくく

くくくくくくく

かたひ

扱あらしを煮るくくく

川舟の淡

扱あらしを煮るくくく

甘藷川小菰より仕出す着菓子うか

字法よし

付あふりくさくきくともすね管ふ
 州の戸小ふの葵うくふ管ふ
 臺まきくまはさきくかきく
 多舟や鞭うけくある若根山
 田植うくく茶屋うくく角田川
 会ねまきく友とわくく田うく
 子乙女のようにとね顔に朝うく
 招新れ早苗穂ふか秋をわか

會盟

交うのさめく亦うく夏料理
 集うくく葵招小木のまふ

筆前裁

隣官士近字の息とすけけ
 子とすけ申いさうかた菜葉を
 とくへて庭ふ裁と名角と
 小雨れまといと守りれと
 およとくくくく

海雲和布とや管の腰養ま角豆

望海觀遊

海松此まやけくあ風の磯洲松

濼倉此濱出と

海去少くや見丸出みと答小か乾

止波浦く

地引すと延巻のすおくさる此夕

幸浦の楳取押さりては橋の

下り入

帆とくさる鯛のさへさやまきさ比

舟興

文とやと只の此の光り那

朝日に七とまき出さく名志や郎

石此枕小郎やあつらるそ此巻

岩根さす藪さ鱗あり走棘

極女小むさささかきて浪はほ

藻れくふや後さかてさるま

原の飛や海老跡す袖ふさる

落れまふや思ふもさし深ま

夏木ささ沈上此破風みす

建長寺無詩俗了人

夏小詩をいふ俗をいふ夏木三
谷木ウラホの鬼をかきこももいふ

午の年午月午の日午乃
時うけふ入る

駿馬埒か入る血使いふ

日休碑いふけいふ逢ちういふ
路ふいふいふ地火とかけきふ難い

いつの向いかにけいふと夏月
きふ入る月や志路りも夏土の山
夏の月帳と紙ふいふ五百あ

市井徳金のいふせふ

出はくりきふふのいふ帳をい

夜讀書

帳をいふや枕いふ帳本の言カサ

申の日いふ帳をいふ

扱早新ん紙帳か風をいふる

帳名名のいふいふいふいふ

碑う志

青の帳も枕といふいふいふ

宗長のいふいふいふ

橋此一つ二つを敷とせし也
 むし白ふ花をく実をく陳皮を
 敷きく火く又新白く 橙を
 松賀秋航岩城へ送る 功者中
 信とやカソへはと

佛骨表

去るくくを曜とありく 韓退之
 射者中、奕者勝
 曜子よんを子あくる 燕あ、河

信儀くあくる人賜をく
 錢中

梁の曜とさるる 馬姓上
 曜ふくは一、真おん反の菊
 云さふけくく日やも
 撰起ふく妹志也免や瓜作
 母のりや又流のく寸去桑瓜
 あさよりく 晴中かたりく六皮
 ありの塩糸のく瓜の存
 瓜の一、元 文をく不略す

けさお非あやまのく瓜拾糸

浅草川道地

富士行や細代小火あさおの小屋
白きふまきまを衣やあー落
くまのくは又あまーひかー日記
明れのよれ木のまもとやとれえ
氷室山里葱北紫白ー日々仲
不奪百姓膏腴とん文選の詞く
百姓たまゆる油やー扱酒

惘農

焼鎌の宵中おあつー田まよれ
和歌買や朝見ー花を夕日秋
登るや猫地糸目くやと思ふ
葦一よ鳴くや六月卯とー三子
百左のふおくま先よ川むき
白きぬとる菅一と川價小
之をとりひかるとひのほほ
く終感さう御階北奇伝ち出て
兵衛門ふよーとてさうぬま
のまあふまあやーさち此車の

林のうけ小御をかくしめりあふと
うらうらむ者此世にさるくしおる
りむく此世の真ふとせしむる

あまのふかき非人美し麻蓬
一晶の若坊を

日蓮よ木す備は蝉の鳴く時
空蝉小吉系との折紙の那
木戸處とわく道む

蝉と聞け一日鳴くお此處
入湯のく木質とくくくく

蝉の声すーらとあつさ指沙

候子と懐紙の表命にて鳥
ふかむる道む

飯粒をかけもさる蝉の衣
視彼蝉の貧者小衣をぬくるを

徳園殿のかり金志はるふを

松の葉とまきふは月の中庭に
拜天王は法橋下

里の子此おまよふむ報子

茂叔譚

傘の蝶蓮のまはるく怪く那

詞古略

考一 妖蓮より淺と包らる

得正観音像

ふ小蓮膠くちまま白ひし

あまをば作はは花の葉受た

こもらんとも庵山の交と申

まはるるまも

あわくくまをくまもま白蓮社

派坊の影くくくく蓮く那

蓮のまは赤繻とく影く若く

幅くけの桐干若く一星へ北

冠里公傷中松山初入の時

川と若や浦の若屋北軸は

小女北帯ふくくまあつさく

侍九市り持一壺居り

朝比奈の葉屋へ入一若く

家舟のまはくくかきさく

まはるるまも

くわくくくくく

生此松いふ事忘れむ汗拭ひ
死の海を汗のうらみもあや
山田悦亭

汗濃きよ夜の宵寝此中うら
身おろしむ一まね織も浮世う
何とね織縮緬をきく一紗の聲

小所の談

腸けけく休むをくくく大くく
かたけりのおろしむくくねをく
多れ松子風の垣をる庭う那

くすの風信日おくる 園庭小

所見

庭う家う星う川色れ涼う那
翁の文子娘のすま色て又とら
風よあらしもすくをくくく
くくくくく

夫山の海う魚あをと涼う那
夕サ草原すくく風の誓う那
涼う母尻めくく今一遊う那

老年と母と信一てお此の果とて
のくく

けふよ老ふらふ部一々すそみ

布袋の襷

藤のうらと子とも勢すか夕涼

祇公日次の歌ととうわくを

河原垣陣利とひさす居か

芝木の十一のまゝのまゝに

朝今お満よしく藤のうらと下す

夕すともよしく男おけしとり利

ひさすとの集お他人のうら

かゝり予晋子のまゝに圓畫と

り

抱き重や妻くえくこめおりふ

曲のうの藤おお湖水を思ひ

漣やあかき表とむらむら

三三

うら福やうらはあゝる麻呂中

其歌中暇ととれ柄枚水

井ふらゝわらふ所の女おひらけ

はやあり

顔あけよ信ふと信す髪は長

露沾公能真也

日あやけく海のこぼるるはるき思
 たちふもかきてはるる海もこと
 わらふもかきてはるる海もこと
 こゝろは招くけお下味や一かき
 判後をよよかきてはるる海もこと
 とくくくくく

け痛き一かきおはく氷も

世あやけく西のこぼるるはるき思
 枯すむ友よ腫の楯 雪は水
 夕あやけくはるる海もこと

黄まへくくくくくく

烟雨村

夕あやけくはるる海もこと
 申あやけくはるる海もこと

雨中吟

白あやけくはるる海もこと
 清茅のあふはるる海もこと
 一くくくくく

夕あやけくはるる海もこと
 申あやけくはるる海もこと

夕まや家とどろく啼一 家鴨
ハ雪よりけ嶮嶮とこの北岸
根挽のらすうはや一 雪のま

望相扇

平らんま深倉とくく日、照る
うくまや掃風ふ似くくちか干
扱まをまろくあふくくくく
片の戸むおきま露の崖う那

醉登二階

酒の瀑布冷夏の九天くく
ゆやほやとくく此下のく

廣のあまふ

すびつとくく小夏の炭俵
障か子樹とすくくく
先好とまきとくく
何ふとん六月相と桂人
市中のまほくく

紙

秋のくくくくくくく

十とて画たるかけその漢

あさるのや藤ふ出るまじし遠ある
藤一子とてあふの瓜此二葉
朝白ふりの若出ーし使
及ん書の志のまじく恨む程垣

七夕

早多や人此心狭瓜をーさ
庭の橋や待とる空の早多
素堂の母七中七夕の秋万
葉の秋此七叶乃奈の勸を

早此夜よんは火細とく夜をま

三遷のがくは懐ひしちのさく
る姫を奪のむとて一日
あつて七夕の奇とまうけさる
とていぬ

文月やまをくみまも母の恩
栢買らひと川流すや天の川
妻早よあふ一とせあふ女
大切此おを明よりく天此川
明早や額とまふ子鞠はる海

秋七種

夕星のなきわく花や女帝也

女さくへののらさくして紫は

まはうひはを七夕たれは向州

よせしそ

雲のすけや味傍こーやをくさる

海辺曉雲

稲藁や朝暈あすけーさるそふ又

海原のこまさくさかおむすま

こまきれこーふささくさく結縁の

夏のうら子柳子さうさる草汁

七月十日此夜在御り合桂子

柳子のうせさくさくさくさくさく

夏とありし骸骨のさる萩の声

御去あり累す

萩もくふ昔薩さくさくさく上巻

又冬萩のさるわくさくさく

さる此處の珍貝ふくさくさく

さる糸薙と西瓜よさくさく借す男

半さくさる娘席さるさく女帝也

遍照の後

傍ふよ鞠のわつら女帝苑

龍母あまの御速成のま

昔のあふれあひの紙とてみか

賢らちかり男の推つとて

くけふらへ

西瓜冷ふぬれ賢れ遠き

神瓜ふれを安まらふや

沾徒餞別

長そむ人の名うとてみか

うたへとも見様のき免事人

芭蕉葉も雀も角をかくら

るる白よりかけしなむる

茅とてふ雨と雨風の屋

鑑素堂秋池

凡秋此荷葉二庭とてみ

茶冬もしてまれ掃除や白芙蓉

盆會

かゝるふり此はさるのク

きしちり糸子借念乞ふ

右の二句文わらへる

陀羅尼品

浪と罷れ拜や暮すの利

分都原

みろくもや分限ふん白の彌勝
又月とくもく刺結と彌領
一世の人此のひひと守と
能知れかくても屋なり大教と
生靈酒れ下くを親仁と
よかかこも入なるあーふ
荷ひかこ此常とくふさと也

切ある事いを

親と子もふもきくや蓮賣
柳枝や声のなりさそ才子坊之
一長生後をたろ一ておとりか
踊るく妻此を希ふ酒さくはり
とよやと名も優美なり角力丸

露

赤虎のけつさーらんをまをこや
船とくもさくく此をや園乃外
み月やひさるいけは娘の子

子子多き少き梅もとくふすおき
茶此けき吐きむらほや影三層

芭蕉座の歌

子子多きと秘教も清くさめり
座の可妻吸り犬わきとせり

息元よなるる懐紙の奥
二巻を子目とさすしる座ふ

宇原の山ふ

川霧やと茶と少くこのけか滅
音夕烟り来りけくすまは浦

寂蓮

和分れ骨核しり山の夕夕那
まゝ海や浅黄おなりそ娘乃書
秋の心は脚一冬後の座はえり

南流の具詞存子ありそ聖
因れ玉川と冬西行上人の場并
わくと強りしる

福の井を名少か落りと秋此雨
七月五日工部之回忘あはれ
智海作をともあひて暮誌

浅州誓願寺念佛堂

三人の声おあそよ秋乃夢

虫

すくろふおねびーさうす浅茅
楮よららまーと神の書いすこん
ほらしておるやうに此まもみち

元禄六年仲秋徳川芭蕉庵

返主の戸よ入し

生綿とるも雲とらぬ生約山
一いふの妻もあそむ天徳丁

翁おともあそきてあそ人の

めくろまふ

あそびり荷分此文や天徳丁

遊湯豆腐

徳の湯、厚と薄とぬ豆腐汁
士を先絶の切おほくはとらた
血を枕席よやまんや守一告我
場子のらむ心さしとる左と
みとたろくはむくくそ命を
及れまあふりけてあつー

詞のこを強し 意のこをさか
こひせしこくま 柏子 愁
眠をさすやせし

陣中の飛脚もあつや一の声
著る北山ききくを床のすゝき
あはれとく床もかゝるん 鳴き
荊のけよきことを纏あつ 小田の鮭
かこかけつ 慈人の様 声と拍
さらぬこふ世とすすふ 籠り那
いづし 性柔弱に ことほし

潮をさすをきて 忽ち死す 彌俗
字がらうよふしと 何すかむと
いづし

小いこや 一口茶子 春此門
かのしと 朝飯白ふ 根泊り那
月

池のこも七分にあつ 音の月
細い花を江戸おけしとて 月の目
てのゆんは丸魚あわて 月とんけ
まら物よのまらるもわらう 月

月ふありぬ波よそあやうらる能事

河女あふ略

名月やふふ年も筆ふふふ口

河女略

信濃ふを老ふ子あわらふの月

仲麿の画讃

月うけや舌を帆ふすく三三山

長柄又臺の記

もろ月とむりーの橋は朽目

月を信也紙紙此小者本言下女

まろ月や侍あふの君と伯父

満百

河うぬの月よ成りて母れ新

娘ふふ丸を柱を月ふりて

河うらふ報うらりてけの月

唐了此片被くく一月の雲

燃くふふ一火此をやふふの月

重と橋と画く

中橋のよのふとあふふの月

月此まふ詩の舟う山う川あ

傳と叫〜叫〜して

少便日記て冬月と云ふころりり
脚めやる函谷やうふ河馬迄
月日此粟氣痛葡萄うつ此其
向來〜推いら里此松糸あり
は多材やふ歯ふさゆるそ細の表
いり粟子袖やうの核のたれい汁
澤川〜養庫〜さうて

栗賣のま園〜から用たりふ
癸酉八月二十九日此直立父葬

送の場〜萌心の想を懐
し四生の起別と云ふ

一 渚〜中 輝〜も末葉と取ら那
野たち〜ふい〜ふ〜のを野花た
程か子少中を新〜ふさ〜ふ
稲〜や穀ヒヨクを播藪其東の中
松の尾の〜子さう妙〜と
堀〜う〜〜層子松おとと
此まふ〜と〜あす中よ志め〜
初〜げら

けふぞとて都の土やあはれ子指

松のよもぎ花と吹あけし様草

東國風来吉れ山のまき火

るるる付

冷泉の珠教りし法ありて葉

草將十唱句

其表 不二班 齋草

葦タケ四交カサ白ユ杆ト

其軸 草ハ蠟燭ハ消レ半ヲ

石突 角仙屠角蒂イヒキ

つみ 笠ハ回ル菌キノコ獨樂トクガク

燒松茸 松枝菌返報

塩松茸 不レ香ハ松ハ雪漬

涼シ小コ葦ハ山雨重シ

其賞 北キタ寛ヤマニ小松茸

蘇ソ上ノ祝イハ宮崎生草ミヤザキナマクサ

了菊

菊の下はあつとるるる石の菊

藤の木のしをさうと一園の菊
千の此菊が人此の字志れし
袖のさや記とくくは菊のさ

主陽

菊の所葡萄れくふささみり

千家の騷人百菊れ依信

さうくやさ菊の蔭人の質を賣

さくもみらさる金とらけて流る

も入ふよある枝のむく菊

内及風虎公十三回忌

菊れさやたがさよささ後には

九月九日庭を拾ひたる人

さくや名と星小輝くれあさ

葉花錢別

友成兵と菊れ使了播く

子孫の袖乃たさ子れし白

十二枚

白鷺の養わく屋さ存此月

つるまもぬ御さくさ子

仔の月松やさくくは此庭

けし子と子ふくくやなれ
様むし此物と粟よ鳴々青い汁
家より川本までさき一石の月

鳥

木兔や百合よえくくゆりとの
にき樹の片山うけや笑ひ菟
山く此戸も忘れもあく柏
まはれよとく稲負きとさく者

小鳥を長哥

アキくく小叔の中山五十一

中村少女お帰連く上

系ヤ一付

山鳥もくさくくもむ 龍康
紅路りく山鳥もか人のまゆり
山鳥くくあく面やおとみも

新越六向港

まはれぬ唐のくくめや下紅葉
義のつらるをやさるゆりてさる草
お葉の食葉を秋アキのしるが

まの秋

丁度虫と申すをわけて書

九月五

福ぬぬ松の形此の秋を味

悲園非

傾博の小奇をわけて九月五

あまき

夢よりうらなふてぬき名じし所
葉のぬきし中長をわけて所

神鳴のまきふありし所あり
今態を志くしは長をわけて

園河の繪

系山を只結くくくく

七とせぬ七回忌

七とせぬ七とせぬ七とせぬ

とせぬ七とせぬ七とせぬ

しとせぬ七とせぬ七とせぬ

時雨瘦松私のお千とせぬ

おとせぬ七とせぬ七とせぬ

得む後くさきと中こそ時由り
松東のすき間と見ゆる時あか
けりる晋子まふさうま八懐
空ふ信くまての死ありしと

風 文之略

木よりしと世子拾ひ是如き卯栗
風とありぬ相平のうけ世貝
芭蕉翁終焉此記之略
かきうらむをさきよりうらや植皮を
ふみぬぬの葉山子にとりる鳥引

みよあまといふ也ーや山のこま

曲平と幻住庵ともおひい文
翁の原と可といふ椎の木と
すか落しともすまぬ翁のまはな
玄賓を世平見るとまよ干菜賣

画 跋

松一末と食のおとん花枯中か
坊主と清及心してくさ清
坊主と清及心

坊主と清及心

朝辭の書あや川らむ紫人夢
細代も大根望をとが免りり

あひま海

福天の床机よりや仕切帳
子衣衣紫親いば衣あり夷海
争を争のちの事とて介りてあは声
滋米城に火洞よりわくとあはのあ
海をさへやせん剥りりあはの声

貞作新定

け着と清吹もきつておて板はあ

去炭刻る火着と斧の幽なり
垣火やと恙けしいらり 焼
火爐のうらゝ麻夢も去葉と枕は
向石の糖もそ浮世も破る物葉
枯つてしよみ此福もや納豆汁
立麻

多々孫の豆下とからんあるとせめ
園守に紙子もむ失くきりり
朝光馬の目より頭中汁
あまこも色極の花に七日市

宿僧房

わささ形一圃かのおまよふ葉
永夜へ敷をさぐりくも柄う那
或る中や毎士此敷のこけ不
或存屋の筆筆整るさく少夜
鳴子鳥来お明ふの枝をさ
村子鳥来お明ふの枝をさ
人の毒むくうううう
此等此意とらようすこめ
片くくと登れ危やあやうと

まふ忘や自利よさくさか

お真

夜真川 益人犬やきり山
犬引く三層將得はり里お真
菰一まらふやと合れぬ鳥
影見世市川之絆を統す

夜学感

夜学感
此等此意とらようすこめ
去る刻はささく人のま

月小酒賣不許入内としな
るわうしん

有家の徳小とて於此程
晒むさやふ小を乃くぬさかみ
町神一系在ふのひんせとるに

貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午霰月十九日懐向乃
くを述ゆ

常とても花橋のむしん那
霰月十九日馬候于黄門光国

卿之清茶亭題周山之佳景

一 此の清茶亭はむしん那
の清茶亭とてけまふ言
田の青山ありとてむしん

多此之破能清一氷茶屋
二 清水寺高那

横粧舎枿や千々の高さあり
六角堂形子堂小町たる塔
おんしんくわくはるる也

三 耕作の清茶屋

九分とらふ多分屋子草をくへる處
はひりてく大根草移ふくを
引く根を梢に漱とくけり

根深ひくまは子苗やあやめ竹

四 黒木此中茶屋 けりすくす舟

生後とくくく堂舎樹林の
つこみん強しぬ茶屋の軒を
かけり新し内藤をくく新築
千一とまふつとまふ

我や猿牛子高候つと木茶や

五 夏相 あま相くく夏平くく けり

夏草やあま子やとる不破庇

六 西行堂 けりの屋も柳言

彼は所より此山は向くともく
とまふる岩らり乃若居水を
す向くもあま位者くあま
とまふく

炭や岩向くかー此法あまくと

七 唐橋 庵内を足して去くを

後分海あつて若雨くけり
とまふく

長橋や勢田くわひんんかま松

八八のの花はるるよとて

坊々新月もつよよ清川あり

九河原書院もくもく水とて

とての笑

八八代とて河原は鍬は流子とて

十西湖もくもくいと後の中亭

よ入る付格をを憐むてり

夏よ毎舟よ来りて西湖あり

よよとて東波くくを吹て

詩とあはれ^漢なむむまはれ橋小舟

右十妻

系北出右岸のよ人を鏡名あり

松風や舟よ家生をゆく西屋形

鏡よ鏡よ一舟の影を系氣味

鏡

妻ならぬ般りてみとお衣

鉄炮のりしむもやあつとけ

もを切てよよくおく一般の面

詩くゆを松に北河豚といふ

鏡よく寸鏡中より鏡の鏡

文略す

系れ湯不冬すももく瓢汁
鮎鯨を少くすけふや 厨^{クリヤ}ふ
只袋うやいふかいた字盤

や

とひ意や大の面出す板板
膝を膝ふすけふや ぎぬ 襦
温能屋くり 多佛く板の意

文略す

是塚のまふくくまじりてき女

堀木のやーと勝手やき友

冨士の畑れかひやなりんよ
淨制をよしくく簡やんやー
そくま思ひ後ろと付あへんあ
とかく化と扇およ極め定ん
後ろろのうみあへんといひ

汎くわさずおけりやーの意
きれ日の声斗一賣く後木か
冨士くはす麦田多き意の早苗ふ
まほとさされ裾ゆや丸合ね

世をたもたげし 世一のくま
 親れあふむる くらりぬる
 七十古来 稀ありと
 やつこころ心 於るるも
 海をかくらん 移るるも
 わがやうらの 移るるも
 凍死忽死の 時や移るる
 漫成五倫
 君臣有義
 家の子孫りあをたふす事忘

父子有親

能くや情を 親を敬ふ

夫婦有別

夫を敬ふ 妻を事ぶ

長幼有序

長を敬ふ 幼を愛む

朋友有信

信を以て 交りあふ

大小の分 元禄十丁巳年

大庭を志路くらく 和歌を乞ふ

あまづらねお坊ふふと昨を死す

舟町海一の画談

弟孝りや只とせむらゝる海子
え日を起すやうなり良孝作
その孝は左の耳よありと

居し物より

蝶拂や諸人々す梅の陰なり
を若るもの餅はくをを鳴り
ふふふん年のほふれよハきあり

酒債尋常往処者人生七十古来稀

詩わきんと年を食ら酒債オカテ式

浪舟や子年浪舟に年垢
年中の放下目くくく此書
豆とう川声此くちる笑ひ水

乾元の名外

長ふ扱れきくく近し得方丸

三科不務煙燭此自画談

今くふ圓十帝や思ふ外
浪舟年此あ世つくとく
年此や只業年此油ひ

くも波流をそのとくを豊田乃
ゆり伊賀此を人おとしのり
りぬるをひてその山より
くくよやまよ

並捨よ及此小みやや年此書

何んそしお住居よ八つやう
をり病さるんをそそりさ
世の中をうけあうや

妖あり紙貧しき昨をうか

大晦日福のころらう年志

法玄園より破戸をとうと
非よとあふ大敷や志

りしも戸板めきたし餅の味

り年尔唾吐くむかみと

聖代

立降おろし日しをぬふ大晦日

雑之部

十及の圖画ハ略之

往昔異邦の佛澄淨昨十
牛とあしして八向迷悟のり
志ゆきしと其書をねんは
るく牛の声音故有く又及
ともしくわのふれん

爰お十及の家と画潰し傳て
笑と万世は孫すよの晋其角

尋牛

やこれおいのういし牛目おれ

呼牛

よあさるあは道園てりさるぬふ

隠牛

爰れおハ福ぬよ病氣の起り

貧牛

仁兼刺やと終らういも辛男

廻牛

小便も貧ふあやら五月の那

番牛

れいさす曉傘をかつせり

無牛

さうくす枕も床も物履い

事牛

何となくあそぶとわらふとやをり

送牛

さゆよの牛も危難をたかおん

老牛

夕やけの空を渡る人の心を時よけ

於冠里公名歌五之梅

三梅

三梅や真の洞へのけちん

^三花のさき平ぬ草や梅の庭

村ありとてさきくや房根の松

凡蟬丸より官をたぐく聖路の

歌といふやとてさきぬ

三梅縁よりけし御り一日の結れ

一丁のめくくの存おけりよさき

志うの城といふやとてさき

幸よさきりわりりさるるふゆん

城といふ字のつらむれよせよ

様子わりして一町世話とせし

子を捨てしむやとてさき親の血

今とてひらけくやとてさき

盆會

かき廻り三日のやうにあつて

十日のやうにさきあつて

ひさしをみよ
とらふるふらふら
すきすき

馬書紙よ
あらはのひ

我北へ 柗梅柳
竹のむら

追加

たあずさや
解所う 固極く

天智天皇

おたむ入
美あひ

藤念

山嶺の額
解るや

画漬

解るや 月おの

妙法蓮華經

多分なりや法の蓮花華經

雪舟亭の花足ふさうさく

何をいふも深なりけり系極

自画談

掉床やとも紙を爰此法合

圃より大工石よりむろの梅

九條殿御下向

傳考りしよとの八景をわむ此門

法殿場小馬休めり大根引

法所及冬定ふと大根引

後州久能の別當さんさめ

かして法をいふを

ゆゑも法を平男の蔵安

旨延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬音原

續五元集 其角附合 全部三册 出来

江都書肆

日本橋通二丁目

前川左衛門梓



